

つり環境ビジョン、放流準備着々と



小網代湾の中間育成施設でマダイ種苗の全数を調べる作業員

マダイ中間育成の状況視察

(一社)日本釣用品工業会と(公財)日本釣振興会は、四月一日から「つり環境ビジョン」事業をスタートし、優先事業のうち水中清掃に続いて、調査型放流事業の準備に着手しているが、七月十四日(日)に放流用マダイ種苗の育成を委託している(公財)神奈川県栽培漁業協会を訪れ、成育状況や稚魚の全数計算など作業の様子を視察した。

この日は、つり環境ビジョン事務局の柿沼清英氏と谷剛氏に本紙記者らが同行。同協会・今井利為専務理事の案内で、三浦市三崎町の小網代湾に浮かぶ中間育成施設に向かった。

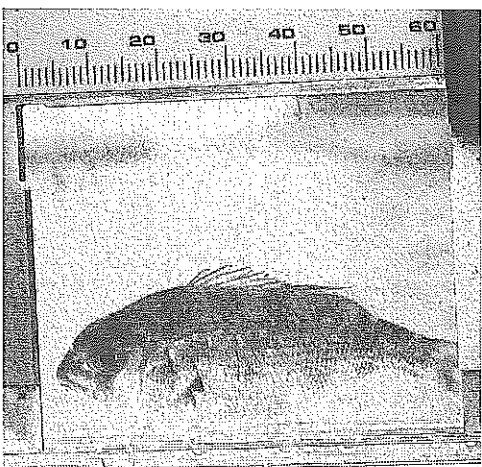


汚れた網から稚魚を移動

放流事業用のマダイ受精卵三百万粒を四月に入

手し、孵化した稚魚は同協会内にある陸上の飼育施設で成育。全長約20mmに成長した稚魚を六月六日に小網代湾の海上筏イ

ケスに移動させた。イケスでは朝から準備が行われ、中間育成した稚魚の全尾数を計算しながら、稚魚の糞や藻類、ゴミなどで目が詰まった網を交換する作業が続け



体長60mm前後に育ったマダイ

られた。稚魚は全長60mm

前後に成長し、網で仕切られた八面あるイケスに約三十五万尾いることが確認された。

現在は一日に合計120kgのエサを四回に分けて与えており、順調に育っている。エサを必要以上に与えると、消化するために酸素消費量が大きくなり、酸欠の原因にもなる。放流に至るまでに

は様々な手順や要素をこなす必要がある。現在は、陸上の中間育成施設で育てているマダイ稚魚を九月下旬から中旬をメドに相模湾一帯に放流する計画。

放流魚の成育や分布状況などに関する調査は、様々な角度から検討した結果、マダイの鼻孔隔壁の欠損から放流効果を検証する方針。遊漁船や市場関係者の協力を得ながら実施する。

同協会では、過去に標識放流を行ってきたが、タグは脱落があり、一年で五割、二年でまた五割が脱落し、タグを付けたままの魚はわずかしかなかったことが考えられる。また、報告率も時間の経過とともに減少する面がある。標識放流では再捕された魚を計算する場合、多くの仮説(推定値)を盛り込まなければならず、精度的に問題があることを考慮し、鼻孔隔壁の欠損で放流魚か天然魚かを判別することになった。

放流直前までアクシデントに見舞われる心配もあり、今後も天候やイワシの魚群回遊、フクなどに注意を払いながら放流に備える。